

KOΣMOΣ

コスモス No. 87 1989 秋

特集

視聴覚への誘い

—感性世代に贈る立体勉強法—



貴重書から

奈良絵本『羅しやう門』と
寛永十四年写『羅生門』

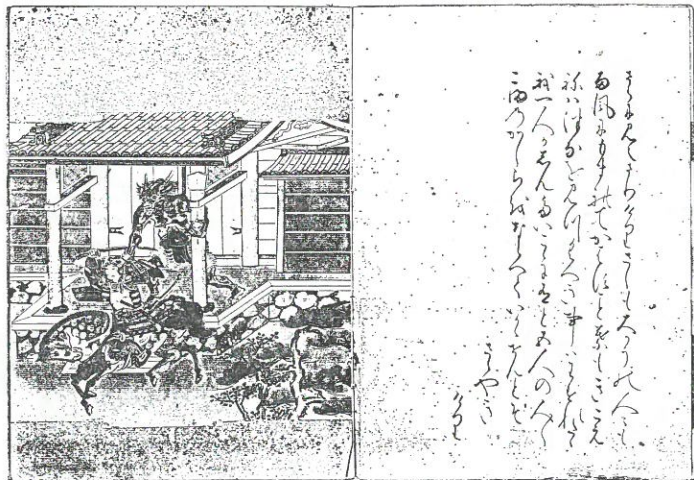
高城 功夫

芥川龍之介の小説『羅生門』は、『今昔物語集』巻二九の説話を典拠としたものであるが、その説話とは異なる室町時代の物語に『羅生門』という作品がある。本書は、武勇伝説や怪物退治譚あるいは名剣説話を内容とするものであり、謡曲「羅生門」、『平家物語』「劔の巻」、『太平記』巻二三「直冬上洛事 附鬼丸鬼切事」等と相通ずる内容で、これらの作品との交渉のもとに生み出された作品であろう。伝本は割合と少なく、異本と称するような伝本も存しないから、それほど流布することもなく、同一系統からの派生と考えられる。古写本も存しないようである。この『羅生門』の写本を、本学図書館では二種類所蔵している。一は奈良絵本二帖であり、他は寛永十四年写一冊本である。

奈良絵本『羅しやう門』(K913.49:R-2)は、列帖装二帖で縦23.3㎝、横17.0㎝。表紙は鶯色地に金糸、朱糸で楓・笹竜胆・菊花等の模様を織りなした錦繡裂。見返しは金紙。題簽は左肩に「羅しや

う門 下」(14.9×3㎝、金箔で雲霞模様)のみ存し、上巻のは剥落。しかも下巻の題簽を貼り違えて上巻にある。蔵書印は「東洋大学附属図書館」の貼付紙があるのみ。但しこの書は島津久基博士旧蔵書である。本文料紙は雁皮紙。上巻二折(一折5枚、二折6枚)、下巻二折(一折6枚、二折5枚)である。絵は、上巻一図は、鬼神退治の宣旨を受けた源頼光と四天王(綱・公時・貞光・季武)・藤原保昌が相談する絵。二図は、渡辺綱が乗馬甲冑姿で膝丸を帶し鬼神退治に出かける絵。三図は、頼光と残り的人々が綱の加勢のため羅生門に向かう絵。四図は、綱が羅生門で鬼神と健闘、名剣膝丸をにかけている絵(左頁図版参照)。五図は、斬り取った鬼の右手を前に頼光と皆人思案している絵。下巻一図は、女装した綱が美しい女房に変化した牛鬼と出会う絵。二図は、頼光が占博士の言を聴いている絵。三図は、頼光の母に化身した牛鬼が屋敷に訪れた絵。四図は、母が鬼の右手を見たいと懇望している絵。五図は、右手を取り返して正体を現わした牛鬼と頼光が決闘をしている絵。以上、上下各五図ずつである。奈良絵は、おそらく専門絵師の製作によるものであろう。すやり霞は金切箔をふんだんに散らしたものの。奥書等はないが、寛文延宝(1661~1681)頃の筆写。本文は、岩波文庫『續お伽草子』に翻刻されている。

寛永十四年写『羅生門』(K913.49:R)は、縦24.1㎝、横15.9㎝の袋綴一冊本。表紙は、茶地に薄灰絹糸で、花・蔓等織りなした錦繡裂であるが



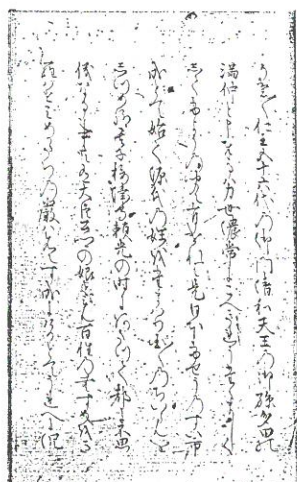
—奈良絵本『羅しやう門』 渡辺綱が羅生門で鬼退治のため名剣膝丸をにかけている絵—

改装表紙である。題籤(10.9×2.8厘の雁皮紙に墨流し金泥線模様)は「羅生門」。改装表紙であるが、題籤のみ新表紙に貼付したもの。表紙見返しは、金切箔を散らした豪華なもの。内題なし(右頁図版参照)。本文料紙は、交漉紙。蔵書印は「東洋大学附属図書館」の貼付紙があるのみ。これも島津久基博士旧蔵書である。墨付三十枚、一面七行書き。第三十丁裏に「寛永十四年丑五月十一日」とある(右頁図版参照)ので寛永十四年(1637)書写。本書の大尾は「国土のはんじやう日比にかはりめでたかりし御代とかや」とある。他本には、この後に「これ頼光の武勇」云々と、後日譚の内容の部分がある。これは後人の増補の可能性が高く、脱落とは考えられない。本書のような形で大尾とするのが本来の形なのではないかと考える。さすれば本書は、原形を伝える本として重要な本である。本書の帙は、紺地に金糸緑糸で蔓・草花等織りなしたものの。本書の箱は濃紅漆塗杉材。左肩に「羅生門」と記した貼付紙がある。上箱裏に「寛政二年/庚戌三月吉日」と墨書。寛政二年(1790)に箱を調達したもので、おそらくその折に表紙の改装・帙の製作をしたものであろうと思われる。

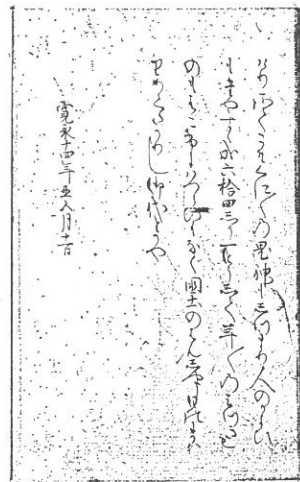
『羅生門』の内容は、清和天皇の孫、^{ただのまんちゆう}多田満仲が源家を賜わった話から源頼光の武勇へと展開、大江山の鬼神退治(大江山絵詞・伊吹山絵詞・酒呑童子・謡曲大江山など)ののち、生き残りの鬼神が羅生門で危害を加えるという。頼光が退治の宣旨を受け、四天王に藤原保昌を加え六人で相談。四天

王の一人渡辺綱が^{つな ひざまる}膝丸という太刀を帯し、羅生門で決闘、鬼の右腕を斬り落とす。かけつけた頼光たちと帰路、鬼に腕を奪還される。この名剣は鬼丸と改称。以後羅生門に鬼は出なくなった。ここまですが前篇で、後篇は、頼光が病に悩む。その原因は、大和国宇多郡大森に棲む牛鬼(羅生門の生き残りの鬼神)だということで、牛鬼退治を綱に命じ、^{ひげきり}鬚切という太刀を与える。夜牛鬼が現れないので、^{へんげ}昼女装して行くと、美しい女房に変化した牛鬼が現われ決闘、右手を鬚切で斬り落とす。頼光は占博士の言によって鬼の右手を石櫃に収め、七日間の物忌みに籠った。六日目の日、頼光の母に変化した牛鬼が、大和国高安郡より訪れる。頼光は物忌み中であるが、母の情にほだされ屋敷内へ招じ入れる。牛鬼の右手を見たいと母は懇望。牛鬼は正体を現わし、右手を奪還したが、頼光に太刀で首を斬り落とされた。この名剣鬼切と改称。この二つの名剣は源家に伝わり、国々の鬼神も鎮まったとする。

本書の伝本は、静嘉堂文庫本(大形奈良絵本二冊)、京都博物館本(絵巻二軸)、天理図書館本(絵巻絵詞二冊)、滋賀県大通寺本(大形奈良絵本二冊)、井田等氏蔵本(絵巻二軸)などがある。本学図書館蔵の二種類の本は、これらの諸伝本とともに貴重な伝本であると言える。なお翻刻は、岩波文庫本の他、大通寺本は、龍谷大学国文学叢書『中世物語集一』に、井田氏本は、『室町時代物語大成 第十三』にある。(文学部教授 たかぎ・いさお)



—寛永十四年写『羅生門』の巻頭—



—同左 大尾の部分と書写年月日—

特集

視聴覚への誘い

——感性世代に贈る立体勉強法——

映像も言語である

四方田 犬彦

文字や言語というものは国や民族によって異なっていて、けっして万国共通のものではないが、それに比べて音楽や映像はどこの国の人間の前にもってきても生まれつき理解することができ、人類の共通語である、などと無邪気に信じている人が多い。

これは大きな間違いである。

というのも、音楽も映像も、それなりに複雑なシステムを通して作りあげられ、また受けとられるものであって、その受けとり方には文化に応じてさまざまなタイプが存在しているからである。これをあきらかにしたのは20世紀の人類学であり、記号学であったが、そこでは人間の認識がいかに言語をモデルとして組み立てられているかが論議されたのだった。簡単にいえば、人は音楽でも、写真でも、映画でも、それをどこまでも言語として受けとり、解読するのである。このとき、日本語とかフランス語といった従来の言語は、はっきり区別するために「自然言語」と呼ばれることになる。

具体的に例をあげよう。

映画というメディアは、前世紀の終わり頃にパリで発明されたものだが、はじめのうちは芝居小屋の特等席のような場所にカメラを置きっぱなしにして、舞台のうえで俳優がドタバタと奇術やサーカス芸を演じるのをただ映写しているだけだった。クローズアップとか、カメラの移動といった技法はずっと後になって開発されたものである。

1910年代の話だが、ドイツでこんな話があった。生まれてはじめて映画館へ行った田舎出のお手伝いさんが、血相を変えてお屋敷に飛んで帰り、奥様にむかって、映画というのは何て残酷な、恐ろしいものでございましょう、と報告した

というのだ。

なぜ、と奥様は尋ねた。

だって、映画というものは、どうしてまた人間の軀を逆さにしたり、切ったりするのでしょうか。わたし、ああいったムゴタラシイ見世物は真平ですわ。

かわいそうに、この純情な娘はクローズアップという技法を知らずに、スクリーンに映し出される俳優の首とか手とかは、実際に切断されたものだと思ってしまうのである。これが、子供の頃から映画の画面を見慣れている者だったら、けっして驚かなかったことだろう。

同様の当惑は、映画が技術的に進歩してゆくたびごとに生じた。1920年代の終わりになって映画が音声を獲得した当時には、観客のなかにはどうにもスクリーンの人物が声を発するのを理解できない人が沢山いたし、その後にテクニカラーが登場したときにも、やっぱり黒白の方が「本当らしくて」いいやと主張する人たちがいた。

こうしたことを考えてみても、映画というものは単にぼうっと眺めていればいいものではなく、それなりに映像を読み解くさいの言語を身につけておかないとどうにもならないものだ、という事実がわかるだろう。われわれがそう思えないのは、もうとうに映画の言語に慣れ切ってしまっていて、生まれてはじめてスクリーンに接したときの驚きとか恐怖といったものを遠い過去に忘れてきてしまっているからである。人は自然言語を習得するように、映画の言語を習得するのだ。いや、話は映画に限らない。美術にせよ、写真にせよ、音楽にせよ、同じことが通用する。少女マンガにしたところで、あの複雑な約束事を体得しないかぎり、一頁たりとも読むことができない。

現在、映像教育の重要性ということが諸方面で唱えられている。大いに結構な話だが、それが単に映像を通して他の情報を効率よく学習するという域に留まっているならば、深い意味で人間の認識に到達することはないまい。映像もまた習得さ

れるべき言語であるという観点からコミュニケーションのあり方を問わないかぎり、文化をめぐる新しい思考は登場しないにちがいない。

(文学部講師 よもた・いぬひこ)

ビデオで疑似体験に

トリップ

船 木 由喜彦

最近では、ほとんどの皆さんがVTRを持っているようです。やはり、その利用のトップはレンタルビデオでしょうか。視聴覚への誘いという点ですが、ビデオの利用という点ではもはや皆さんはずいぶん進んでいるわけです。ここでは家にあるビデオデッキをどうやって大学での勉強に生かすかについて、そのヒントを書きましょう。

情報の摂取の点で視覚情報は優れています。皆さんも聞いたことは忘れてしまうが目で見ただけでは良く覚えているでしょう。特に、実際には体験することが難しいことも、視覚による疑似的な体験で得た情報は、より確実に自分の物とすることができます。映画がおもしろいのは、この疑似体験ができるからに他なりません。さて、大学の講義科目の中にも、実際の体験が望ましいものが数多くあります。代表的なのは、外国語のヒアリングとスピーキングです。例えばニューメディアを理解するのも実体験が早道です。この実体験を手軽に得るために有効なのがビデオです。

利用の具体的な方法ですが、まずは、講義に関係しそうなビデオテープを捜してくることです。なかなか難しいですが、最近では良いビデオもずいぶん出回ってきています。一般に高価ですから大いに図書館を利用しましょう。町のレンタルショップの洋画も外国語の勉強に役立つでしょう。第二は、テレビ番組の録画です。良い番組は録画しておいてじっくりと視ましょう。NHK特集はおすすです。(著作権問題があるので個人で楽しんでくださいね。) 第三は、やはり実際に体験しに行くしかありません。

一つ注意することは、ただ、見っぱなしにせず、ビデオから学習するという意欲を持って見る

ことです。映画でいえば、主人公になったつもりで疑似体験することが必要です。ただ、一部特殊愛好家向けのなんとかビデオにのめりこんでしまつては困りますが。

皆さんも吟味してビデオを選び、疑似体験にトリップしてみてください。

(経済学部助教授 ふなき・ゆきひこ)

見たり聴いたり

景 山 正 隆

国文学科で開講している「日本芸能史」を担当している立場から一言――。

私の「日本芸能史」は、通史ではない。年度ごとに、専攻の近世芸能史に関わるテーマを設定して、私なりの^{うんちく}蘊蓄を傾けているつもりである。

どんなテーマにしても、対象が近世の芸能であり、しかも、殆どが現代にも伝承されているものなので、私は、まずその実態を踏まえて、それぞれの芸能の歴史・性格・本質にアプローチしてゆくことが必要であると考えている。

ところが、今の若い世代の人たちは、近世の芸能一歌舞伎・人形浄瑠璃・邦楽など一に対して積極的な関心をもっている人は極めて少数派に属する。見たことも聴いたこともないというのが、受講者の大半を占めているといってもよい。おのずから、「日本芸能史」の時間には、まず芸能そのものの実態を知ってもらうために、どうしても視聴覚資料を駆使することが必要になってくる。

ところで、講義に必要なテープ・VTR・スライドを用意するには、それなりの苦心を必要とするし、また時間をかけなければならないので、準備がなかなかたいへんである。ところが、せっかく時間をかけて準備をして教室に臨んだにも拘らず、時折、がっくりすることがある。

スライドを見せてしゃべっていたり、テープを聴いている時には、必ずしもわからないことであるが、VTRを見ている時に、時折、はっきりと目につくことがあるのである。それは、明らかにVTRを見ていない学生がごく少数ながらいることがある、ということである。それがわかった時、私は、何のために時間をかけてVTRを編集

してきたのがわからなくなってしまう。そんな時、私は、必ず、一旦VTRのスイッチを切ることになっている。

芸能は、“見たり聴いたり”することを踏まえてはじめて本質に迫れるものであることを銘記しておきたい。

(文学部教授 かげやま・まさたか)

見るから感じるへ

松 下 吉 男

深夜映画を4時まで見て、やっと2時限目に間に合っても授業中は居眠りばかり。このような学生が増えたことを身近に感じるのは私だけではないだろう。昔は深夜放送といえばラジオと相場は決っていたものだが、最近はテレビにレンタルビデオと“見る”ものが氾濫している。一步選択を誤ればとんでもない事件へと発展してしまう。

しかし、考えようによっては、これ程“見る”ことに異和感を覚えない学生にとって、視覚に訴える教育はすんなり受け入れられ、その効果が十分期待できよう。私自身建設現場のスライドやビデオをよく使うがその時の学生はこの時ぞとばかり目を輝かせるのである。(もっとも熟睡する学生もいるが。)

最近いろんな博覧会が各地で開催されている。私も昨年埼玉博で行列に加わったことがある。数十分待つて数分の映像、確かに大スクリーンの映像は見事であり、その技術たるや目を見張るものがある。しかし、感じるもの、心に残るものがない。用意された“見る”ものだったのです。

人間の知識の80%以上が目から吸収されるという。「目は心の窓」である。すばらしい講義も聞く耳を持たないと心には残らない。目は判読する能力と知見を与えてくれる。

実学として経験できない部分を視聴覚によって補うことは大学教育の中で重要なポイントであり、これが授業中のみならず、自由に利用できる施設や、自宅で深夜映画に代って見られるソフトの充実が待たれるところである。

いずれにせよ、何となく流れるがままに見ていたものが、目というアンテナを通してピピッと感

じる。そんな毎日でありたい。

(工学部講師 まつした・よしお)

巻戻し ↔ 再生

穂 田 清

運動技術を習得するには、一にも練習、二にも練習、三、四がなく五にも練習。これが私の学生時代の“技術”習得法であった。ところが、練習ができない、やれないときは、先生・先輩諸兄が教えてくれたことは何か。mental practice or mental training わかりやすくいうと、イメージ・トレーニング。そう、頭の中でイメージを描いて練習を行うものである。すなわち、直接動作しないで頭の中での観念的な練習などとも呼ばれている運動練習法の一つである。この練習は、疲労が少なく、恐怖心を伴わないで実施できるので、技術の上達のためだけでなく、動機づけの効果も大きいところにある。運動技術が未熟な段階では、イメージを描いても視覚的なものに限られているが、技術が上達し、技術の理解度が高くなるにつれて、イメージは次第に運動感覚的なものに変化して、遂には自分自身が運動を実施している時と同じ生々しい体験を得るようになるのです。今日、運動技術の視聴覚教材は充実しているので巻戻し↔再生を活用して、運動学習を楽しんで!!

また私達は毎日健康な生活を送っているときは、自分の身体の構造や働きについては、ほとんど意識しないが、しかし病気になってはじめてからだの働きを意識し、健康や体力の維持・増進を意識したときから、身体の構造と働きについての知識が必要となり、それを求めようとする。解剖学や生理学では難しいし、興味も沸かない。それでは、運動を行ったとき、身体のいろいろな機能がどのように変化するか、運動によって器官や組織がどのように改善されるかなら、知ってみたいと思うでしょう。「運動の生理」ビデオ No. v. 60~65 医学映像教育センター制作

巻戻し↔再生をして運動の必要性を実感しよう。

(工学部教授 あきた・きよし)

くせになるかも…… 視聴覚

—— 3 館 A V 室案内 ——

<朝 霞>

“4,266” これ、何の数字かわかりますか？
 実はこの数字、昭和63年度までに朝霞分館視聴覚室で登録された資料の点数なんです。「ヘー、意外と多いんだ。」「ふーん、こんなもんか。」とまあ、それぞれ感想をもたれたところで、もう少し詳しく朝霞分館 A V 室についてみていきましょう。

昭和61年4月に、個人ブース30席と110席を備えたホールをもつ新しい朝霞分館視聴覚室が生まれました。オープン後3年間の利用者は延べ55,000人を超え、今年度に入ってから、すでに9,000人を超える利用があります。

この A V 室の特色は、資料が図書と同様に開架式になっているのと、個人ブースの機器を利用者が自分で操作できるところにあります。CD、ビデオテープ、VHD、カセットテープ、レコードといった各種資料を1人でゆったりと、そして友達といっしょに楽しむことができるのです。

それではここで、たくさんの資料の中からほんの一部、人気ものをご紹介します。

何といってもダントツは、ポピュラーのCDです。授業の合間に息抜きって感じで聴いたり、聴きながらお勉強という人もいます。これに次ぐ人気は、スポーツ・音楽・劇映画関係のビデオ、VHD、クラシックのCDといったところのようです。中でも今年1月から利用が始まったVHDの「トップガン」の人気には驚きです。トム・クルーズの顔を見ない日はない！と言っても言い過ぎではありません、ホントに。他にはこの夏話題になった「インディージョーンズ」の1,2作目「レイダースー失われた聖櫃」「魔宮の伝説」や「愛と青春の旅立ち」「戦場のメリー・クリスマス」……あげたらきりがありませんが、とにかくVHDの人気は赤マル急上昇です。ところがこの秋、これら人気ものたちに強力なライバルが登場です。今まではホールの催物でしかお目にかかれなかったレーザーディスクの映像

が、個人視聴室に進出しました。「風と共に去りぬ」「荒野の七人」「太陽の帝国」などの新着を加えて堂々のデビューです。『うちの新人、どうぞよろしく』

さて、皆さんどのような秋をお過ごしでしょうか？ 図書館の本を借りて、じっくり名作に触れるには一番いい季節です。と同時に、芸術・勉学の秋でもありますよね。そんな秋にうってつけの資料も A V 室にはあるんです。

まず、芸術の秋におすすめするのは、レコード鑑賞です。時にはCDから離れて、ちょっぴり雑音が入るようなLPを聴くのも趣きがあるものです。そして勉学の秋に活躍するのが、語学・法律をはじめとするカセットテープや、教養のビデオテープでしょう。この機会に、1つテーマを決めて A V 室で勉強するのもよいでしょう。なお、音楽以外のカセットテープと語学のビデオテープ、レコードは貸出可ですので大いに利用して下さい。

さらに、ホールで行われる催物についてご案内しましょう。月に数回、劇映画・音楽・ドキュメント等を、ダイナミックな音と映像でお送りしています。古き良き時代のものから最近のものまで、バラエティーに富んだ内容をそろえて皆さんをお待ちしています。プログラムは、朝霞キャンパス中央掲示板や図書館内のポスター、ちらしをご覧下さい。

いかがですか？ 非常に簡単ではありましたが“アサカの A V 室”の雰囲気伝わったでしょうか。

まだ1回も来たことがない人、そんな部屋があるなんて知らなかったという人、そして、工学部や短大、聴講生の皆さんもぜひいらしてみ下さい。きっと気に入っていただけると思います。

最後に利用時間のお知らせ

月～金 9:30～16:30

土 9:30～12:30

※学生証か館外貸出カードを忘れずにね。

<白山>

さて、どこに視聴覚室があるのかご存じですか? 「えっ! 白山にも視聴覚室があるの?」なんていう声も聞こえそうですが、それは4階にあるのです。

白山の図書館の中では、視聴覚室はやや地味な存在ではあるのかも知れません。しかし、もっと多くのみなさんに利用していただけるよう、ただいま担当者は奮闘努力中であります。

当視聴覚室は、規模は小さいながらも、所蔵している資料の豊富さでは、長年の蓄積により、朝霞分館に引けをとりません。

最近では、昭和の記録全30巻、おくのほそ道全12巻(ともにVHS)、体系不動産鑑定士講義(カセットテープ)などをはじめとして、いろいろな分野の資料を購入し、みなさんの利用に供しております。

現在('89.7.24)の資料所蔵数は、下記のとおりです。

・レコード	4,319枚	・フィルム	56巻
・鑑音テープ	5,707巻	・ビデオテープ	963巻
・スライド	203種	・CD	156枚

合計すると、11,404点になります。

視聴覚室には、どのような資料があるのかがわかるように、分野別の目録(ex. 落語、英語、演劇、音楽…etc.)も用意しております。

所蔵している資料は学習の手助けとなるものはもちろんのこと、勉強の合い間の楽しみとして利用していただけるものも数多くあります。たとえば、音楽資料の場合、クラシックをはじめとして、ポピュラー、ニューミュージックなど、幅広いジャンルのものを取りそろえております。

ぜひ一度、4階の視聴覚室へお立ち寄り下さい。

最後に肝心の窓口利用時間……

午前の部	(月～土)	9:30～12:50
午後の部	(月～金)	14:00～16:50
夜間の部	(火・木)	17:30～19:50

<川越>

コスモスNo.84ではAV資料の所蔵点数をお知らせしましたが、今回はその内容をご紹介します。

<ビデオテープ> 合計181点

○企業紹介 53点

「先端技術に挑む」(三菱金属中央研究所)

「次世代の頭脳たちへ」(富士ゼロックス)

「松下電器産業の挑戦」(松下電器産業) etc.

○科学工業 83点

「人工知能: トロンの道程～コンピュータの歴史」

「バイオテクノロジーの衝撃」 etc.

○劇映画 9点

「ブリキの太鼓」

「フランス軍中尉の女」

「ベニスに死す」 etc.

<音声テープ> 合計743点

○語学(英語、独語、仏語) 707点

会話、スピーチ、英検、文法 etc.

○法令(不動産法規) 8点

○講演(川越校舎 市民大学講座) 28点

最近著しい発展を続ける科学技術の進歩に伴い、広範囲にわたる情報提供の観点から、特に科学工業、企業紹介の資料収集に力を注いでおります。

図書館 あ・ら・かると

★工学部分館第二閲覧室の開設★

分館では、閲覧室の狭隘から、懸案であったグループによる学習の出来る部屋として、平成元年度の前期試験を期して、第二閲覧室を開設いたしました。

現図書館より少し離れた4号館1階に50席を設けました。多少不便な場所ではありますが、図書館の資料を持ちより、意見の交換や実験結果のまとめ等に、大いにご利用下さい。なお、利用につきましては、カウンターにお聞き下さい。

TOYO UNIVERSITY LIBRARY INFORMATION BULLETIN **ΚΟΣΜΟΣ**

1989 秋 (No. 87) 1989年10月20日発行 編集: コスモス編集委員会 発行人: 早田芳郎 発行所: 東洋大学附属図書館 〒112 東京都文京区白山5丁目28番20号 Tel. 03 (945) 7314 ©東洋大学附属図書館 1989